

# 授業リフレクションとしてのラベルワークの実践：大学編

長谷川伸（関西大学）

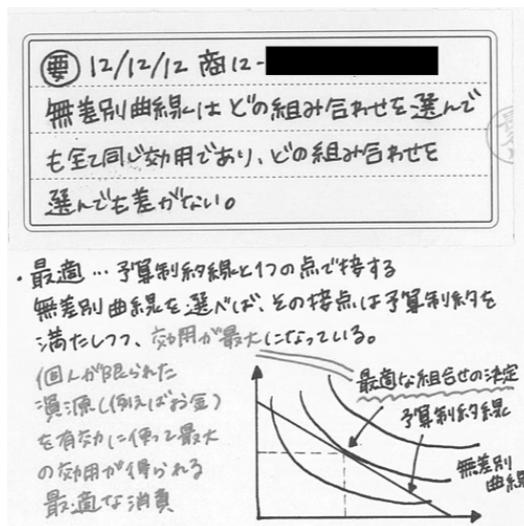
## 1. はじめに

授業の成果として問われるべきは、教員が何を教えたかではなく、学生が何を学んだかである。したがって、学生が授業で「ほんとうは」何を学んだのかを知ることが、担当教員にとっても、学生本人にとっても極めて重要であるが、容易ではない。学期末の伝統的な筆記試験やレポートに表現される学びは、そのごく一部にすぎない。また、授業終了直前に学生にミニッツレポートを提出させること自体は容易だが、「出しっ放し」にすると形骸化しやすいし、教員が全てに目を通しコメントするには負担が重い。

一方で和栗（2010）によれば、学習における「ふりかえり」の重要性が明らかになっているにもかかわらず「日本の大学教育におけるFDの文脈では『ふりかえり』

の学習効果や、教員によるふりかえり支援に関するノウハウの共有が十分に進んでいない」現状がある。

学生が授業で何をどのように学んだのかを知るために、報告者は50-300名規模の授業で長年「ラベル図解」を活用してきた。「ラベル図解」は、作成者＝学習者に授業のふりかえりの機会を繰り返し与えることによって、「学びの自覚化」（林1994:50）をもたらす、学習を生じさせるものである。なお、この「ラベル図解」は元々、林（1994）のラベルワーク技法に基づくものである。



要点ラベル図解（部分）例

## 2. 「要点ラベル」「感想ラベル」とは何か

以下で「要点ラベル図解」と「感想ラベル図解」とは何かについて、私が現在担当している50-150名規模の授業（専門科目「ラテンアメリカ経済とビジネス」「国際投資論」「国際協力論」）での、「要点ラベル」「感想ラベル」の記入から始まるその作成プロセスに沿って説明したい。

履修生は、授業終了直前の8分前後で、1行目に日付、学籍番号、氏名を書き、2-4行目に授業の要点を書く「要点ラベル」1枚と、授業に対する感想（気づき、発見、疑問）を書く「感想ラベル」1枚とを作成する。

「ラベル」としているように、ここで用いられる紙片は、高さ80mm x 幅38mmであり、一般に用いられるミニッツレポート用紙と比しても十分に小さい。この大きさは「気軽に、いざ書こうとすると要約が必要で、しかも言いたいことはほぼ書ける紙面」であり「書く側である学生にとっても、読む側の教師にとっても負担感のない」ものである（林2002:39）。

ラベル1枚には1つのことを書くことを原則としているので（林2002:70），授業の要点や感想をそれぞれ1つにまとめて1枚のラベルに30-50字程度のワン・センテンスで書く。単語や句ではなく文であることを求めるのは「書いた本人に意味を問いたださなくても、その意味が一つに定まる」からである（林2002:70）。学生にとっては「授業終わりにたった2枚のラベルを書けばいい」ので負担感はないが、実際には簡単ではない。そもそも頭の中の思考・観念を外在化させることに困難があるし、加えて「要点ラベル」については、ノートテイキングに熟達していないと、その内容（伝えたいことの中身＝要点）を記述できずに「海外直接

投資とは何かについての説明があった」「経済学で重要な5つのキーワードを学んだ」などと記述したものが出てきやすい。こうした問題は、授業冒頭の「ラベル・タイム」(5-15分)で優れたラベルや気になるラベルを計5-10枚紹介・コメントすること、時として要点ラベルに書くことを(例えば「今回の要点ラベルは、均衡点とは～である、の形式で書いてください」と)指示すること、ラベルを書き終えた直後チームで「ラベルの読み合わせ」を行うこと、こうした3つのとりくみを通じて解決していく。なお、この「ラベル・タイム」は、取り上げたラベルをきっかけとして前回の補足説明も行う時間になっている。

一方「感想ラベル」については「いまの思いをすっとワン・センテンスで書いてください」と指示すると、あれこれ考えずに率直な感想が書かれることになる。当初、率直な感想が書けない履修生でも「ラベル・タイム」や「ラベル読み合わせ」を通じて書けるようになっていく。こうして「要点ラベル」「感想ラベル」の営みを見てみると、記入されたラベルそれ自身が作成者＝履修者に授業のふりかえりの機会を与え「学びの状態」(何をどう理解しているのか、どのような思いで学んでいるのか)を、書いた学生本人と担当教員に向けて発信していることがわかる。

なお、このラベルは黄色、赤色、白色シールがセットになった3枚複写式であり、同時に3方向に即時発信(配布)が可能である。報告者が担当する授業では、黄色ラベルは履修者本人が図解作成用に保管し、赤色ラベルと「ラベル貼付・提出用紙」に学生の手で貼付けられた白色ラベルは、教員に提出する<sup>1</sup>。本人が書いたラベルが手元に残るとともに、他のラベルは提出され活用されることがポイントである。この仕組みを使って「要点ラベル」「感想ラベル」をピックアップし、担当教員あるいは履修生有志(授業運営委員)がコメントしたものを次回授業で配付する「ラベル新聞」が作成されることもある。

### 3. 「要点ラベル図解」「感想ラベル図解」とは何か

「要点ラベル図解」「感想ラベル図解」は「要点ラベル」「感想ラベル」を使って、学期末に履修生本人が個人で作成する。「要点ラベル図解」は、授業の要点が一目でわかる「自分の教科書」である。似た者同士の「要点ラベル」を同じ「島」にして、その内容(主張)にふさわしい「看板」(タイトル)をワン・センテンスで付け、次にいくつかできあがった「島」同士の「関係線」を引いて構造化し、図解全体として言えることを結論として書き、その結論のエッセンスをタイトルとして書くように指示している。

一方「感想ラベル図解」は、「自分の学びの経過(プロセス)を振り返り、その成果(リザルツ)を自己評価するための図解」(林1994:50)とされているが、報告者の授業においては、その目的を学びのプロセスの表現に絞っている。手順としては、時系列に感想ラベルを用紙に貼付けて、全ての感想ラベルについてコメントを書き込み、図解全体として言えることを結論として書き、その結論のエッセンスをタイトルとして書くように指示している。

こうして「要点ラベル図解」「感想ラベル図解」の営みを見てみると、図解づくりが作成者＝履修者にふりかえりの機会を繰り返し与えていることがわかる。まず、過去の自分が書いたラベルを一つひとつ読み直し、そのラベルが書かれた授業を思い起こして、その内容に対してコメントや補足説明をする段階で、ふりかえりの機会が与えられる。次に、感想ラベルは時系列に、要点ラベルは組織化・構造化されて図解となるプロセスを経ることで授業全体をわかり直す機会となり、図解全体として何が言えるのか、何がわかるのか

---

<sup>1</sup> 赤色ラベルは事務にそのまま渡され、出欠データ入力のために使用される。白色ラベルが貼付された「ラベル貼付・提出用紙」は履修生有志(授業運営委員)によるふりかえりミーティングでシェアされた後に、スキャンされてクラスにWEB公開される。

を考えて結論とタイトルをつけることはメタ認知、「学びの自覚化」（林1994:50）を促し、改めて授業全体をふりかえる機会となる。もちろん、ふりかえる機会を与えれば、必ずふりかえりが生じるわけではない。しかし、繰り返しふりかえりの機会を与えることで、ふりかえりがよりしやすくなることは確かであろう。なお、この「要点ラベル図解」「感想ラベル図解」は学期末提出課題として扱い、成績評価対象としている。

#### 4. ラベルワークの授業への導入

前述した「要点ラベル図解」「感想ラベル図解」は、報告者がさまざまな授業で長年ラベルを活用してきた一つの到達点ではあるが、唯一の正しいラベルワークのあり方ではない。ここに紹介した実践は、特定のディシプリンと特定の授業観・学習観を有する教員が、特定の授業形態・教育環境に即して築きあげた土着性の高いものに過ぎず、そのまま他の授業に適用可能なものではない。

しかしながら、ラベルワークは授業のふりかえりの手法として捉えた場合、規模を問わず、授業形式を問わず、多種多様な授業で「小さく生んで大きく育てる」式の無理のない導入と柔軟な運用が可能である。感想ラベルを授業終了直前の3分間を使って書かせることから「小さく」始めることができる。感想ラベルを書いた直後に「ラベル読み合わせ」ができれば、ラベルをてこに他の学生との交流が実現する（同じ授業に参加していても全く異なる感想を隣の学生が抱いていることに驚く）。

加えて、次回の授業で何枚かの特徴的なラベルや気になるラベルを、スライドに埋め込んでコメントする「ラベル・タイム」を設ければ、それだけでフィードバックとなり、履修生と担当教員とのやりとりが表現される。余力があれば、全部あるいは一部の感想ラベルを掲載し、それに対してコメントをつける「ラベル新聞」を次回授業で発行してもよい。この「ラベル新聞」の作成を履修生有志に任せてもよい。もちろん、さらなる活用方法（さらなるふりかえりの機会）として「感想ラベル図解」（学びのプロセス図解）がある。なお、要点ラベルは感想ラベルよりも、手厚い指導が必要だが、基本的な展開は感想ラベルと同じである。

ラベルワークを授業に導入する際の注意事項としては、第1に、最初のラベルを書いてもらう前に、ラベルの活用・公開についてしっかりとアナウンスしておくことである。第2に、最初はラベルの書き方の指導を徹底する必要がある。記入のポイントとルールは極めてシンプルなので、慣れればたやすいのだが、シンプルであるが故に、学生が戸惑うことがある。ワン・センテンスで記述できなかつたり、「楽しかった」だけで終わってしまつたり、学籍番号などの必要事項を書き忘れてつたりするので注意が必要である。導入時の注意事項としては第3に、感想ラベルの内容に幻滅しないことである。往々にして、当初は感想ラベルを読むと、教えたことを学生が意外と理解していないことを思い知ることになる。あるいは、学生が意外と文章力がなことを思い知ることになる。これは担当教員にとって衝撃かもしれないが、これまで知ることができなかった実態を、知ることができただけで前進である。一方で感想ラベルを読むと、予期せぬことを学んでいたつり、よくわかってつれていたりすることも知ることができるので、それを励みにすればいいのである。

ラベルワークを導入して、ふりかえりによる学びの自覚化を促進し、学生たちの生き生きとした顔と声にあふれる授業づくりにチャレンジしてみませんか。

#### 5. 分科会のリフレクション

本分科会では2013年度秋学期開講の「国際協力論」履修生2名の感想ラベル（図解）を比較検討することを通じて、感想ラベル（図解）が学生にとって繰り返しふりかえりの機会をもたらすこと、および、感想ラベル（図解）によって授業内容を学生がどのように理解しているかがわかることを示した。以下では、本報告に対して分科会参加者が書いた「感想ラベル」をいくつか紹介し、質問に答えたい。

(1) 学生にとっての価値：ラベル記入とラベル図解作成によって授業を2回ふりかえる

ラベルによって一年間の学びが目に見え、それをきっかけに授業を思い起こせるとはすばらしい。	一度書いたラベルを、学期末にもう一度見てつっこんだり、追加したりするのが良い。やりっぱなしじゃなく。	振り返りを2回行えるという点はおもしろい。書いた時のテンションを思い出してもらえれば良いな。
その日の授業の終わりと全てが終わった時、それぞれ感想を書くことによってふりかえりの幅が広がるとわかった。	学期末に再度ふりかえる効果は思った以上に高く、授業に取り入れようと思った。	単に感想を書くだけでなく、振り返り、一つの講義を何度も思い出すきっかけになるのが良い。

(2) 学生にとっての価値：ラベル記入とラベル図解作成はメタ認知を促す

字にすることで、残り、後で客観的に自ら考察することができる、達成感も生まれるな、と思いました。	ラベルワークはメタ認知につながるということがよくわかりました。	学生が何が分からないのか、授業の後何が分かったのかを自分の中に落としていくシールだと思います。
---	---------------------------------	---

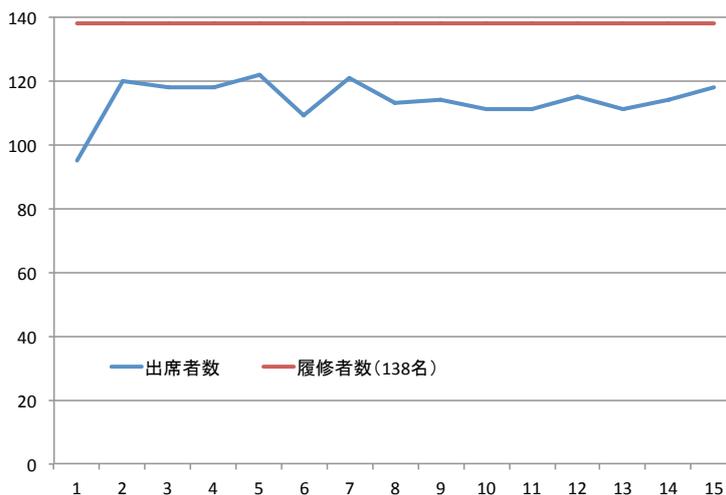
(3) 教員にとっての価値：学生が作成するラベルとラベル図解はフィードバックになる

2人の対比が面白く、少ない文字数で相当な情報を得られることがわかった。	たった数枚のラベルで学生の受け取り方がわかるのは興味深い。	要点ラベルと感想ラベルを毎回記載することにより、内容が頭に入り、教員へのフィードバックも行われると感じた。
-------------------------------------	-------------------------------	---

(4) 長谷川 (の授業) は興味深い

大学教員とは思えないほど、情熱のある人だと思います。
長谷川先生は前向きでプラス志向だと感じました。
長谷川先生の大学での授業が学生にとって興味関心を高めるものであることがわかりました。
年間を通じて出席率が一定というのはすごく驚いています。
大学の講義で利用できるというのはすごい。

2013年度国際協力論：出席率



(5) 質問：ラベルの使用方法・回収方法

ラベルが3枚あるこの使用方法がとても気に入っています。	ラベルワークの具体的なこと、たとえば回収方法などを知りたい。さらに詳しく学びたい！	出席カード代わりとしての利用など、黄・ピンク・白の使い方が知りたい。
-----------------------------	---	------------------------------------

【回答】私が担当する「国際協力論」などの授業での使用方法は先述の通りですが、この3枚複写式シールラベルの使い方は自由です。授業スタイルや授業観に即して活用していただければと思います。ただし、ワン・センテンスで記入することと、ラベルの属性すなわちWho (作成者)、When (日付)、Where (場) は外さないほうがいいでしょう (ラベルの作品性・記録性が失われてしまいます)。

ラベルは個人で書きますから、グループ編成をしない授業でも実施できます。ラベルに授業の要点や感想ではなく、たとえば質問を書かせたり (質問ラベル)、クイズの答えを書かせたり (回答ラベル) するのもいいでしょう。ディスカッションに先立って、自分の意見をラベルに書いておいて (意見ラベル)、これを発表することからディスカッションを始めると、よりスムーズになると同時に、ディスカッションの記録として残ります。

このラベルは3枚複写式ですから、同時に3方向に発信が可能です。この特徴を生かして、たとえばプレゼンテーションが授業に組み込まれている場合、プレゼンテーションに対する感想ラベルについて、黄色ラベルは書いた本人 (作成者) が保管し、赤色ラベルはプレゼンターに、白色ラベルは担当教員に渡すことができます。こうすることで、瞬時に感想を3者間でシェアすることができますし、3者3様にそのラベルを使って、先述の「ラベル新聞」などをつくることができます。

出席カードの代わりに使うのであれば、学籍番号や氏名だけでなく、ワン・センテンスで感想 (今の思い) を記入させるといいでしょう。2枚綴りのラベルを授業前に配り、1枚目には授業にあたっての思いを書くラベル (先ラベル)、2枚目には授業終了直前に授業をふりかえっての思いを書くラベル (後ラベル=感想ラベル) とすると、ふりかえりがより容易になります。なお、ラベル配布を1人1セット間違いなく配布できるのであれば、遅刻してきた学生には2枚綴りではなく1枚だけの (後ラベル用の) ラベルを配布することで、遅刻管理 (遅刻を記録することで減らしていくこと) ができます。

書かれたラベルの回収 (提出) 方法は、個人 (1枚) 単位とチーム単位に大別されます。いずれの場合でも、作成者本人の手元に1枚はラベルを残しておく (ラベル図解を作成するために、授業への参加を証明するために) ことになります。チーム単位で回収する場合には「ラベル貼付・提出用紙」を作成・配布して、チームメンバー全員のラベルを1枚の「ラベル貼付・提出用紙」に貼って提出させるといいでしょう。その際に、メンバー全員のラベルが正しく貼られているかをチェックし、教員に提出する責任を負う「ラベル提出係」をチームに設けるといいでしょう。「ラベル提出係」は、大切ですが追加的な仕事をもらうので、成績に反映させるといいでしょう (私が担当する授業では1回につき0.5点を加えています)。

(6)質問: どのように評価するのか

評価の方法がわかりにくい。

【回答】私の授業では、ラベル図解を主たる学期末課題とし、成績評価に反映させています。その評価方法は、ラベル数 (出席数) と、担当教員が指定した形式的要件をどれだけ満たしているかを示す値の積を基本としています。つまり、学生の学習上の変化や到達を直接に評価しているわけではありません。

(7)質問: 出席率とラベル図解の評価と成績の相関関係はどうなっているか。

ラベルワークと授業の出席率の相関関係が気になった。またラベルワークの生徒の感想が気になる。

【回答】授業への出席とラベル図解の評価は強い相関が認められます。ただし、これは成績の7-9割を占めるラベル図解の評価方法が、ラベル数（出席数）と、担当教員が指定した形式的な要件をどれだけ満たしているかの係数の積を基本としているからです。

ラベル図解を作成した際の学生の感想は、それが学期末提出課題であるだけに入手することが困難ですが、学生によっては感想ラベル図解の結論の一部として書いてくれることがあります。以下は分科会で紹介した2013年度秋学期開講の「国際協力論」の例です。

このように一回ずつ講義を振り返ることがないのでとても難しかったがしかし、自分が感じたことが変わっていくのが見え、少しずつでも成長しているんだと感じた。（4年次、男）	ラベルを読み返すだけで、このラベルの授業がどんな内容であったかを、鮮明に思い出すことができた。（2年次、男）	ラベルを通して授業の振り返りをするのが珍しく、振り返れて良かった。（2年次、女）
グループワークが苦手だった私がこの授業を通して最後の授業では相手にうまく伝えることができたと思うまで変化していた。そして今後GWの経験を活かしていくためにも感想ラベル図解でグループワークの重要性を再認識することができ進歩できたと思う。（2年次、女）	私は私が思っていたよりも自分が好きで、自分磨きも好きだったようだ。この感想ラベル図解を作成したことからこのような発見があるとは思わなかった。おそらく、このような発見を体験させるために、こういう課題をさせているのではないかと思った。（3年次、男）	国際協力論を通して、自分自身の認識や考えが変わるなど、成長できたことを図解をとおしてふりかえることができた。特に、自分が思っていたことが違うと分かった授業については印象が深く、鮮明に記憶している。間違いに気付き、考えをかけることができるような学びができたことをとても幸せに思う。1回1回の授業ごとに何か学んだことが分かり、またそれを現在も自分の中に持てているということを図解を作成しながら、気付き、意味ある学びができたと感じた。（4年次、女）
ラベルは授業内を簡単に振り返られるいいツールだと感じた。（2年次、女）	要点・感想ラベルの作成は、書くことで毎回授業内容を頭で整理することができるのでよかった。また、授業中もラベルに書くことを意識しながら聞くことで重要なポイントに気付きやすかった。（3年次、女）	

（参考文献）

林義樹『学生参画授業論』学文社、1994年。  
林義樹『参画教育と参画理論』学文社、2002年。  
和栗百恵「「ふりかえり」と学習—大学教育におけるふりかえり支援のために」『国立教育政策研究所紀要』第139集、2010年。

※私が担当する授業（ラベルを活用している授業）は、全て常時見学歓迎です。

※ラベルワーク講習会を随時開催いたします。メール(shin@kansai-u.ac.jp)などで問い合わせください。